

裂織の通った日本海の道

——越後のツツレと能登のツツレ——

山崎光子

1. はじめに

かつて日本海は、わが国の文化の伝播のための重要な交通路であった。大陸からの人や文化の移入も勿論あったが、日本海を通じて、それぞれの沿岸で育まれた文化や人の交流もあったであろう。それは、わが国の歴史の表舞台を彩るような華やかなものばかりではなく、裏舞台を生きる庶民の漂着などにもなうような、ひそやかなものもあったにちがいない。

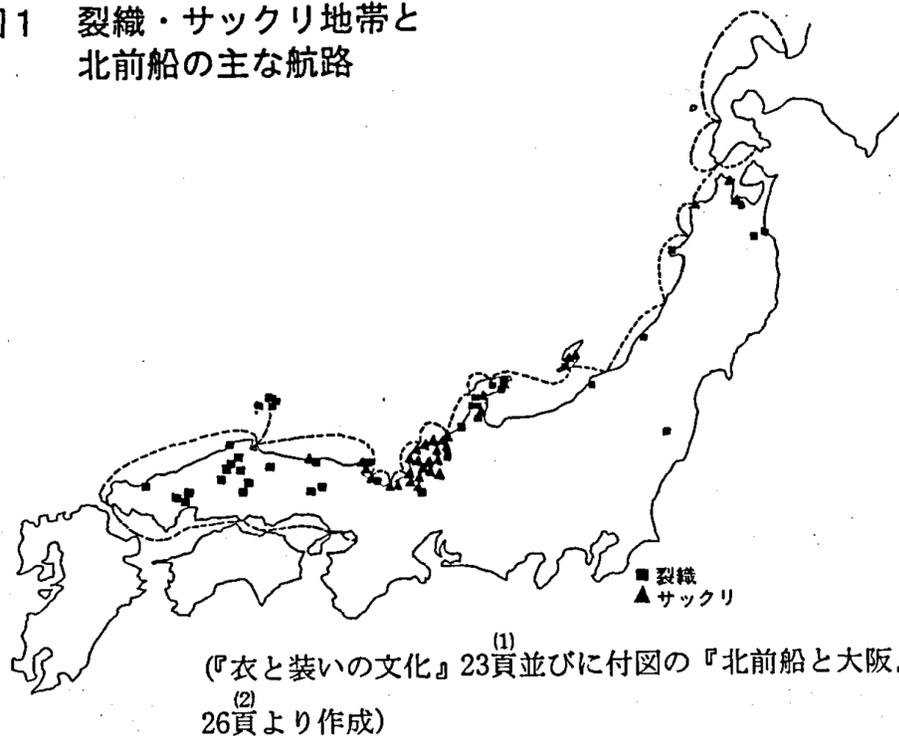
そして、働く庶民の仕事着についてみれば、その中でも特に、裂織^{さきおり}——経糸に太い麻・藤などを用い、緯糸に古木綿布を細く裂いて織りこんだ布による仕事着——に関しては、どうしても日本海とのかかわりを抜きにして語ることの出来ないことに気づく。

それはすでに言われているように、裂織の緯糸の原料となる古手の木綿が、大阪など上方から西廻り航路の北前船によって運ばれていたことと深く結び付くのであろう。北前船の通った日本海沿岸の寄港地には、多くの船絵馬が遺されている事によって、その存在が確かめられている。

新潟県の裂織は、佐渡については資料が随所にあり、また技術保存や復元も試みられているが、越後側ではすでに過去のものであり、県中央部と県北の2地域にほぼ限られ⁽³⁾、いずれも日本海に沿って横たわる山の、内陸部からみればその裏側の、海に面した山陰のわずかな土地に住む人々によって細々と織られていた。これらの地域には、海を渡ってきた人達に移り住んだことを思わせるような有形・無形の資料も残っている。

県北の裂織は、藤織り地帯である上海府^{かみかいふ}（現、村上市）の吉浦^{よしうら}や柏尾^{かしお}の一部で補足的に織られていたが、隣^{はやかわ}の早川は、古くから朝鮮系の人々の村といわれており、アクセントや女性の肌の美しさがそれを証明しているという。吉浦と柏尾は、きわめて隣接しているにもかかわらず、例えば仕事着の様式について、異なる形状と着装法を持ち続けているなど相容れない部分を保っていた。また、この辺りは早くから船乗りの地としてなりたってお

図1 裂織・サックリ地帯と
北前船の主な航路



り、特に廻槽船時代になってからの繁栄は、廻槽問屋の寄進した、京の名工の手になる仏像群などからも推察でき、船絵馬も⁽⁴⁾多く残されている。

越後の主要な裂織地帯は、県の中程に位置し、米どころ越後平野を見渡す弥彦山や角田山の、その日本海側の山裾に点在するにしかんばらぐん西蒲原郡の村々である。ここでも、それぞれの村による習俗の差異などはすでに指摘されてい

るが、^{えちぜんはま}越前浜という名の村さえあることでもわかるように、かつて越前や能登から海を渡ってきた人々が住み着いたと言い伝えられている。その土地の巻町郷土資料館には、この辺りの裂織の発祥地とみられる^{かくみはま}角海浜と石川県の能登との交流について、カラフルな航路図とともに次のような解説文のパネルが掲げられていて、見学者のロマンを誘う。

角海浜の人たちの先祖は能登のヒカリ浦から流れてきたと信じられている。そしてその人たちを導いてきたのが観音様であり、その台座はもとのヒカリ浦に残っているという。もっとも能登から海にできれば潮流にのって、たいていこの辺に漂流するであろう。能登を去った理由は織田信長の圧政とされている。

この西蒲原の沿岸部と能登・越前とのかかわりについて、仕事着の面から探ることは出来ないものかと、ここ数年来思い続けてきたが、機会を得て、北陸路の仕事着を^{*}尋ね歩くことができた。

その結果、旅のあちこちで、特に能登で、越後の裂織地帯で見知った事物のイメージと、重なり合うようなものの幾つかに出会い、思わず立ち止まってしまうことがあった。

もっとも、新潟に戻ってから考えてみると、その大方は一炊の夢のようなもので、尋ね

*第6回日本海文化を考える富山シンポジウム「衣と装いの文化」(1988.10.22・23)に参加し、富山市の考古資料館や郷土博物館の見学する機会を得たが、またその前後に北陸路を歩き、下記の博物館の方々から貴重な資料を見せていただいたり、ご教示を頂くことができた。特に輪島市立民俗資料館の資料を多用させて頂いた。あわせてここに感謝の意を表します。

石川県：石川県立歴史博物館・松村外喜氏、輪島市立民俗資料館・横岩正美氏
福井県：福井県立博物館・坂本郁男氏、三国町郷土資料館・上出純宏氏

あてた能登の光浦^{ひかりうら}や鵜入^{うにゆう}に沈んで行く日本海の夕焼けと同じ日本海の夕焼けを角海浜でも見たというものであったり(写真1)、鵜入の干し柿と、移築された角海浜の民家の前にぶら下がっていた赤い干し柿との類似だったり(写真2)、輪島市の呉服屋の店先で売っていた「のと・わじま・ござる(五猿)」が、巻郷土資料館のサルコを連想させるものだったり(写真3)、というような、たわいないことが多いのであるが、しかし能登で入手した、カガリという変わった名の細縄で編んだカゴが(写真4)、帰ってから調べてみると、角海浜でもかつてはカガリと呼ばれていたことがわかり⁽⁵⁾、やはり両者のかかわりに関心をもたれた。それらのカゴは新潟では一般にテゴなどと呼ばれていて、カガリはこれまで耳にしたことがなかった。

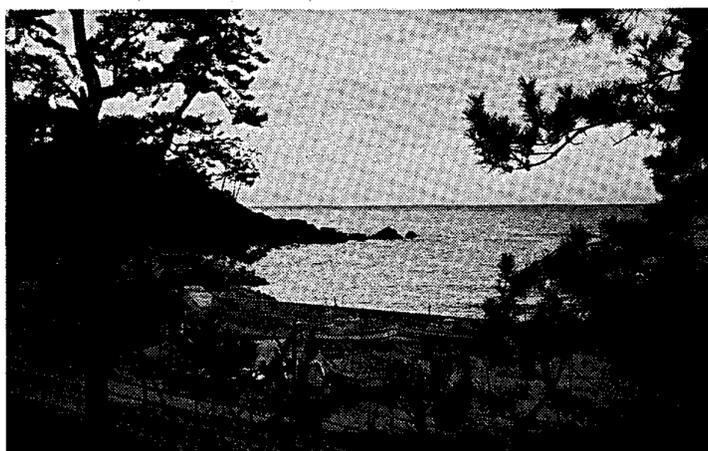
この山仕事用のカゴ——道具や収穫物を入れ肩に掛けたり背負ったりするカゴ——のカガリの名称は、全国調査資料によれば⁽⁶⁾、能登では、清水、国光、福野、大島、寺家などにあり、富山県でも能登に近い沢川のほか、新潟県寄り沿岸の宮崎、笹川、上野から池谷、



角海浜—新潟—

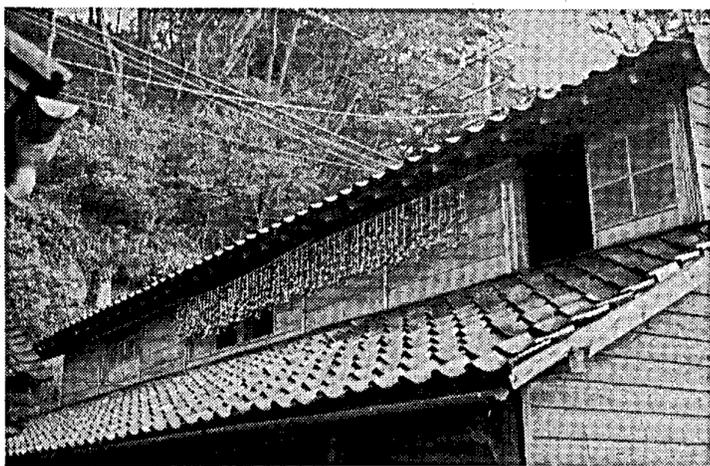


光浦—能登—

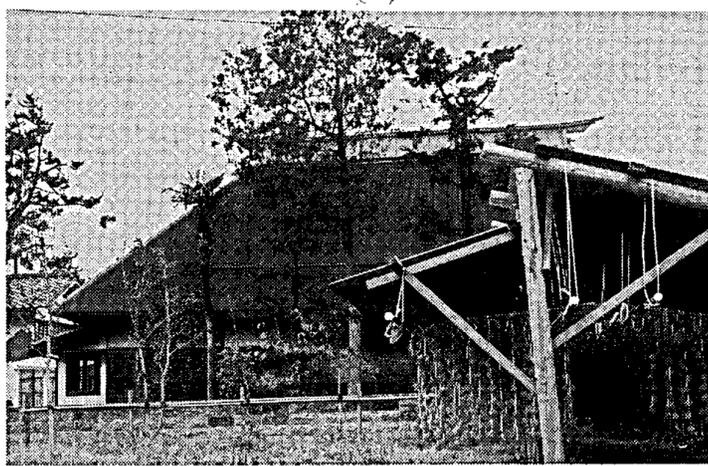


鵜入—能登—

写真1 日本海の夕焼け

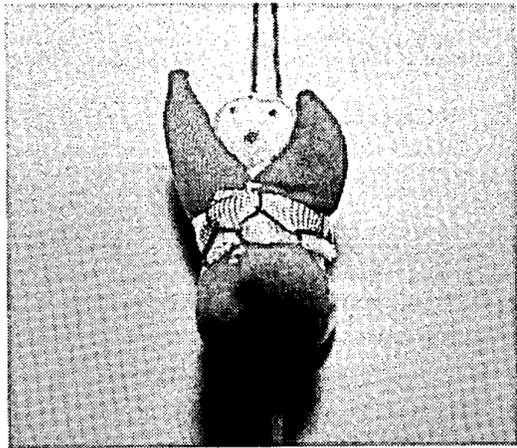


鵜入—能登—

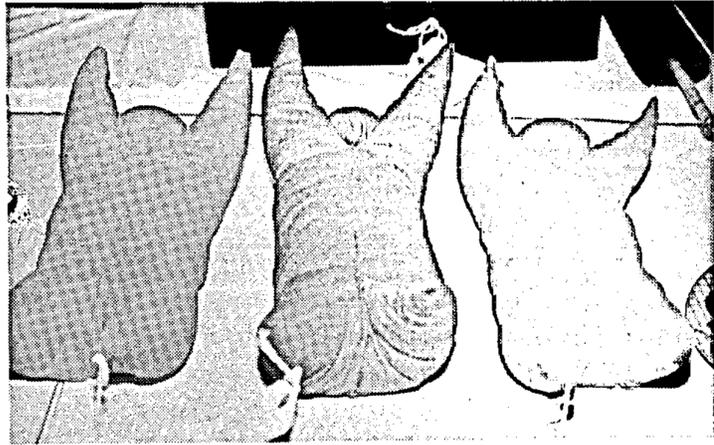


五ヶ浜—新潟—(背景の民家は角海浜から移築したもの)

写真2 干し柿づくり



のと・わじま・ござるの1つ
(輪島市の呉服店)

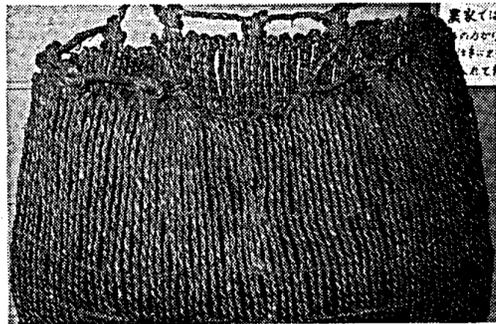


サルコ (巻町郷土資料館蔵)

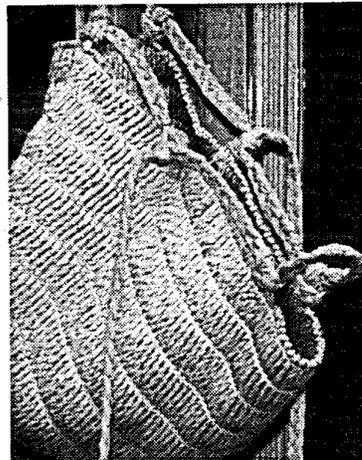
写真3 サルの人形



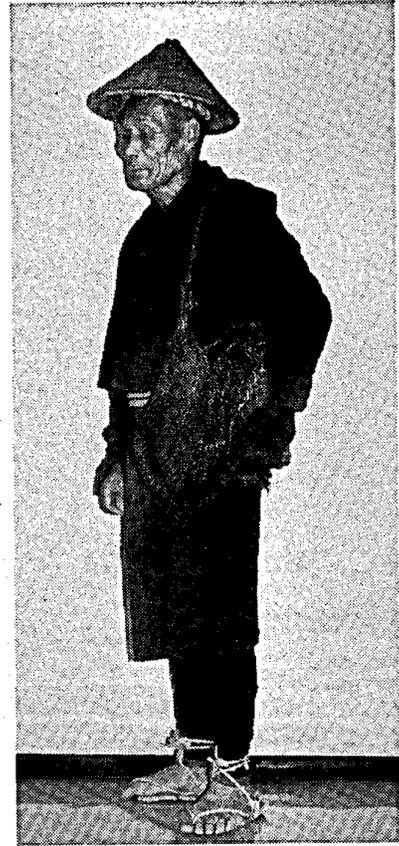
鶺鴒入のニダワラー能登一



能登のカガリ (輪島市立民俗資料館蔵)



間瀬のテゴ一新潟一



角海浜のカガリ一新潟一

写真4 カガリ

東種にも分布しており、福井県では認められないが、南下して鹿児島県の半下石でも似た形状の山行きの背負い用具をカガイといっているなど、調べ始めると関連分野にまで限りなく拡大していく。

ここでは裂織に焦点を絞り、越後との類似点を他地に求め、その点と点をつなぐことによって、裂織の来た日本海の道をさぐることはできないものかと考え、本テーマに着手することにした。

2. 越後と能登・越前との交流

越後の裂織地の史的背景

新潟県の日本海側のほぼ中央部、佐渡の島と向き合うようにして在る一海村、西蒲原郡巻町の角海浜が、この辺りの裂織の中心地ではなかったかと考えている。

この村は原子力発電所建設予定地となり、昭和48年(1973)に、老いて村に残っていた人たちも、闘争疲れの中で、心をのこしながら離村してから、すでに十数年が過ぎ、海に面した何も無い荒れ地には、日本海からの風が、荒々しく吹きまくっている。かつては、その浜辺に立つと、50m先とそのまた50m先の海の中に、只七礁と武七礁の二つの岩礁があって、最後の角海浜の住人だった古老達が子供のころは、その岩まで競って泳ぎ遊んだものだといひ、その岩は、さらにひと昔前までは、只七家、武七家の屋敷の庭石だったものが、いつの間にか、付近の家並みとともにそのまま海底に埋没してしまったといひ⁽⁷⁾。海岸の決壊はすでに止まっているが、2寺を擁し、医者、紺屋、機屋などもそなえて255戸程が賑わった、かつての集落の町並みなどは想像することもできない。

巻町は史学研究の盛んなところで、町民などで構成される巻史学会があり、その巻町双書も昭和35年(1960)から刊行されてすでに30有余冊に至っているが、この角海浜の廃村時に、一村全戸にわたっての民俗資料の悉皆収集を行っており、服飾関係の資料も、隣村の五ヶ浜へ移築した角海浜の民家のタンスや長持の中や巻町郷土資料館に保存されている⁽⁸⁾。

角海浜から裂織が始まったのではないかとする理由の一つは、その中に、大量のツヅレが残されているからであり(図5-2, 図7-1・2)、それは近隣の村での聞き取り調査と比較しても、他村ではこれほどまでには織っていなかったと思うからである。実際、古文書によっても、角海浜は、文政10年(1827)ころから、機織りが女の稼業となっていて、男の出稼ぎと漁業に頼るばかりという不安定な家計を支えていたらしいことがわか

**本報告で用いた資料は、昭和50年代の個人調査や、新潟県民俗学会の共同探訪、寺泊町史編纂にかかわったもののほかは、昭和59年からの西蒲原郡巻町の町史編纂の調査執筆員として聞き取り並びに資料調査によって知り得たものを許可を得て用いさせていただいた。巻町・巻町史編さん室・巻町郷土資料館をはじめ、資料を提供頂いた多くの方々に深謝します。

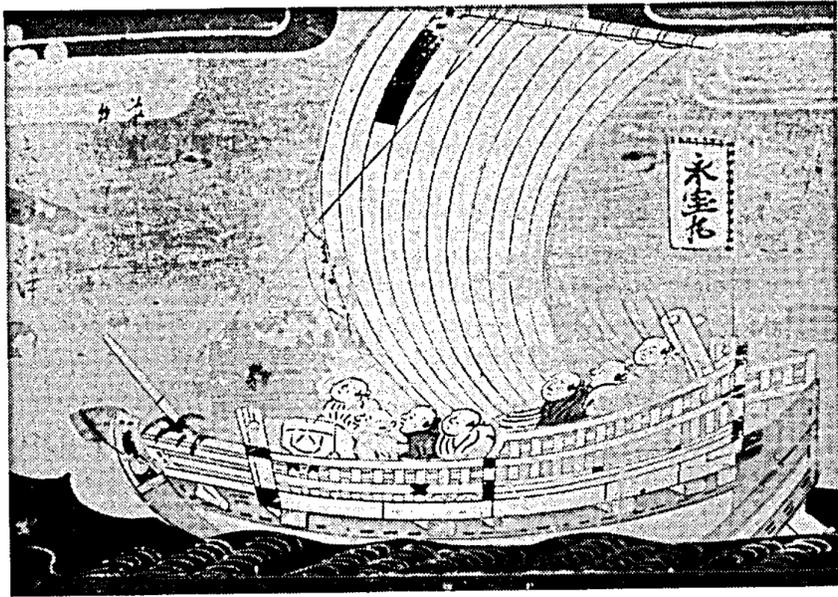


写真5 安永3年の船絵馬
(新潟県三島郡寺泊町・白山媛神社蔵、新潟県文化財観賞会撮影)

る。そして女が機織りに熱中するあまり周囲に荒地ができるほどになり、天保13年(1842)には機織りの差留令が出ており、古文書はそれに対する機織り継続嘆願のための庄屋から代官所への口上書であった。⁽⁹⁾ 結局、田畑による生業のない土地柄の角海浜では、『越後土産』(1864)に「角海の毒消し^{どっけ}」としてあげられるなど世間に知れ渡った、女の毒消し売りの出稼ぎの道を選ぶことになる。

明治30年代には、当時の織物(ツツレ、蚊帳、コギモンなど)や、機織り道具の残骸が⁽⁷⁾ 大方の家に名残をとどめており、麻の栽培も、明治40年頃までは行われていたというから、今日まで残っている資料と考え合わせても、機織り稼業の対象の中に裂織のあったことは推察できるであろう。

またこの頃は、往路に古着なども積み荷したといわれている北前船が、すでに日本海を走り廻っていた。西蒲原郡に隣りあわせた三島郡寺泊町^{さんとう てらどまり}には、安永3年(1774)から明治に至る52面の船絵馬(写真5)のあることで知られており、年代的にみても、角海浜における紺木綿布の裂きぐさの入手という、材料確保の可能性は充分にあったと考えられ、実際、その隣のやはり回船の土地柄の三島郡出雲崎町^{いずもさき}の文久2年(1862)の文書によれば、山陰地方や上方、瀬戸内との取引の中に木綿古手の品名がみえる。⁽¹⁰⁾ もっとも寺泊町にも出雲崎町にも刺子はあるものの裂織は見られない。⁽³⁾⁽¹¹⁾ また、織りあげた裂織が、再び日本海を走る船に乗ったか否かについては今のところわからない。

船絵馬に関して言えば、このあとに述べる、角海浜への移住者のある能登の鶴入と光浦の港も、北前船の活躍する港として栄えており、それを反映した船絵馬が集中してあったという。⁽¹²⁾ 能登のその周辺地域には、後に裂織分布図にしめすようにツツレと呼ばれる裂織が多く、そこからの裂織技術の伝播が考えられる。

能登・越前との交流

さて、角海浜は、すでにふれたように、能登からの移住集落であることが定説となっているが、能登から角海浜への移住の歴史は、それほど明らかになっているわけではない。

角海浜には「年貢を4年間免除するから、人々を集めて村を発展させるよう」⁽¹³⁾とする天正18年(1590)の古文書があり、受け入れ態勢は充分にあったことがわかり、このころから能登方面よりの集団移住者も相次いでいる。勿論この時期は、角海浜の機織り稼業の時期よりはるかに早い⁽¹⁴⁾が、その後も真宗の宗教活動を通じての越後と能登の交流は長年にわたってかなり緊密だったと言われており、時代は下るが、単純な裂織技法は、直接あるいは間接に容易に伝播し得たと考える。

角海浜への移住は、能登の光浦村・鶴入村から直接に、さらに能登の深見村からも越後の野積(三島郡寺泊町)を経て来たといわれている。また深見村からは、角海浜の隣の間瀬(西蒲原郡岩室)や角田浜(西蒲原郡巻町)に、さらに能登の小池村からは間瀬に移住している。そして越前の橋屋村からは、その名の通り越前浜(巻町)へと、元和7年(1621)までの30年くらいの間に能登や越前から大挙して越後に移り住んでいる。⁽¹⁵⁾

越前浜については、福井県の越前側の資料には、年貢未進の困窮のために船による集団逃散の事実があったものの、幕府に聞こえることを警戒して噂することを厳禁したためか、地元には越後逃散の伝承はないなどとしているが、越後側にはそれを傍証する史料が見える。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾また朝倉義景の残党ともいわれており、その縁の寺を通じての両者の交流は、住職の代が替わるたびに、明治36年(1903)、昭和26年(1951)と続いているという。⁽¹⁸⁾

また角田浜については、日蓮上人が寺泊から佐渡に流罪になったときに強風で漂着し船待ちしたことが因縁で佐渡とのかかわりが深いとされている。⁽¹⁹⁾互いに遠望のきく位置にある西蒲原の浜と佐渡は、海路を通じての往来はどこの浜でも出来たであろうが、特に角田浜には、佐渡の裂織(写真6)に類似したものが残っている。

この越前浜や角田浜は、角田山の北側の沿岸添いの山裾にあり、田畑も山林もある半農半漁村であったが、

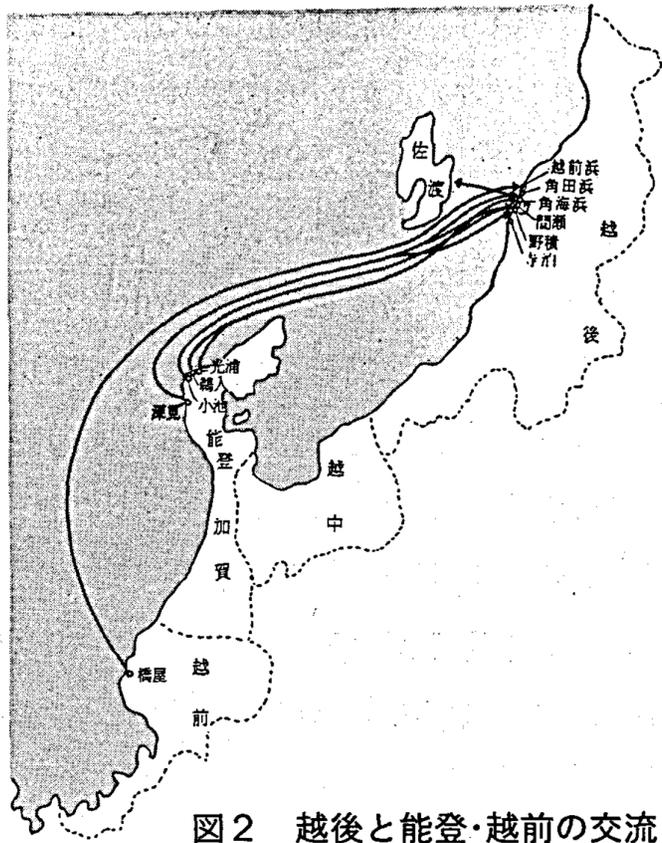


図2 越後と能登・越前の交流



写真6 佐渡のツツレ
(新潟県佐渡郡金井町・よっちえむ蔵)

いずれも砂地のため肥沃ではなく、角海浜にならって女は毒消し売りの出稼ぎに出ていた。

最も歴史の古い、角海浜の隣村の五ヶ浜も、やはり「田畑無御座候（天保六年）⁽²⁰⁾」であり、毒消し売りにも出ているが、かつては廻船業の豪家を持つ湊町として栄えたため、裂織の着用は少なかったのか、今は残っていない⁽⁸⁾。

日本海を渡って来て越後の角田山裾の未開発の僅かな土地に住みついた人々は、山かげのそれぞれの村で、独自の文化を育てていったようであった。

このたび、能登、越前における仕事着を尋ねて歩き、特に江戸時代には長期にわたって互いに行き来するなどの深い交流を持っていたという輪島市鷺入をたづねて見たが、鷺入は明治2年（あるいは5年）に大火で村の大半が焼失しており、越後のことも話しには聞いたようにも思うが、尋ねようにも史料がないという⁽²¹⁾。村端の焼失を免れた家にも、北前船で運ばれた陶磁器の類は屋根裏にあるが、裂織はないとのことで、見る事が出来なかった。

3. 越後の裂織

ところで、新潟県の主だった裂織地帯、西蒲原郡では、巻町の角海浜を中心に、同町越前浜・角田浜、西蒲原郡岩室村間瀬などの日本海沿いの村が裂織を織った村であるが、

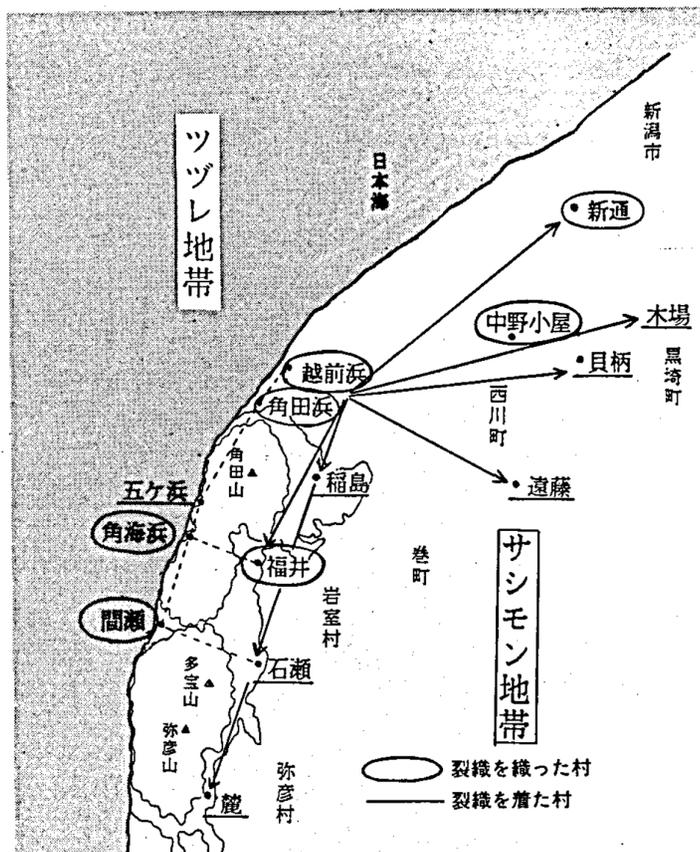


図3 新潟県西蒲原郡の裂織地帯と推定伝播経路

それがさらに山の反対の平場側の山麓の巻町稲島・福井でも用いられるようになってきており、さらにそこから広がる越後平野の西蒲原郡岩室や、現在新潟市になっている中野小屋などにまで波及したことが残されている裂織からわかる。その位置関係は図3のようであり、裂織の伝播経路は、これから述べるような理由で同図のようではないかと推定している。

そこでまず、現在まで残されていた裂織の全体像を具体的に把握したい。末尾で、海浜部の裂織を図7-1から図7-4に、山麓・平場の裂織を図7-5から図7-7に示した^{**}。

西蒲原の裂織の形状は、図からも概観で

きるように、平袖の付いた紺色の裂織と紺や色横縞の袖なしの裂織とがある。両者それぞれについて眺めてみたい。

袖のある裂織

角海浜の収集資料のなかには、袖なしの裂織とともに大きな平袖付きの裂織がたくさんある(図7-1-1)。いずれもツツレと呼ばれていた。

大袖のツツレは防寒用仕事着で、主に漁師が沖に出るときに着用したものといられている。⁽²²⁾昭和50年代からの周辺の他の地域での聞き取り調査では、漁師の衣類もサシコやドンザになっており、袖のあるツツレはよほど古い家でなければ持つことができず、実際に着用していたのを見た人に出会うことも少なかった。福井では、葬式のために焼き場まで棺を担いで行くのを見たわずかな記憶がのこっていた。⁽²³⁾仕事着も新しいうちは、祝儀・不祝儀の手伝い仕事時に、村人のユニホームのように用いることはよくあることだが、いずれにしてもこのツツレは古い時代の衣料のようである。

角海浜の裂織については、もう聞き尋ねることは適わなかったが、間瀬でようやく聞き出せたところによると、⁽²⁴⁾裂織などのハタを織ったのは明治16年(1883)頃に90歳で亡くなったおばあさんまでで、それもどこの家でも織ったようなものではなく織ることのできた家は限られており、このおばあさんは、明治天皇の新潟県への行幸の時に、宿で使う蚊帳を織ったと聞かされている。間瀬では袖付きの裂織を大ツツレ、袖なしを小ツツレと呼んでいるが、大ツツレは袖を皆はずして小ツツレとして着用しており、袖ももう見つからず、間瀬の大ツツレの形を知ることは出来なかった。

角海浜に大量に遺されている裂織も、前述の機織り稼業の年代と照らし合わせて、間瀬のおばあさんと同年代の人によって織られたものではないだろうか、間瀬のおばあさんは、角海浜の裂織の盛衰の様子を全部見聞してきたのではないだろうか。

角海浜と間瀬の呼称は同じツツレであるが、角田浜ではツツレではなくサシモンと呼んでいる。1枚だけ残っていた袖のある裂織は(図7-3-1)、角海浜とは異なり袖幅が極めて狭く、佐渡のツツレ(写真6)に似ている。これは、やはり佐渡とのかかわりに由来するものかと思われる。

また、角田山の東側の平場側の山裾にある、巻町福井に残っている1枚の袖付き裂織は(図7-5)、袖がちょうど角海浜と角田浜の間道的な袖形であり、どちらかといえば普通の着物の袖形のイメージに近い。

福井は、^{いわむろ}岩室から^{とうじま}巻町の^{ゆべし}稲島に至る旧北陸道筋にある^{ゆべし}柚餅子の産地で、角海浜とは角海

峠を越えて一本の道でつながっている。角海浜まで歩いて1時間位、途中の坂道には石段もあって、多くの人たちが行き来していたというが、海岸側の村々を結ぶ、間瀬や五ヶ浜への磯づたい浜づたいの道よりは、世間とつながりをもつための重要な道であったに違いない。しかし福井にも手織りの重い麻の蚊帳がのこっており、裂織も地元で織ったものだという。ここでもツツレとはいわず、サシモンと呼んでおり、袖なしも図7-5の写真左のように、後述の平場の様式であるので、平場の機織り技術による裂織であり、隣の稲島、ひいては越前浜の系統に属するものと思われる。しかし、袖のあることや紺無地に限定されていることなどからみて、角海浜からの材料の導入や形状などの刺激伝播があったことも考慮に入れなければならないだろう。

袖の無い裂織

一方、袖のない裂織は前記のいずれの地域にも残されていて、これらは昭和30年代までは、山仕事の時に木を切ったりカヤを刈ったり、それらを山から担いで降ろしてくるときに着用されていたが、特に古い裂織地帯と思われる角海浜と間瀬の裂織などには、袖を解いてはずした跡がそのまま明瞭に残ったものが多く、やはり、本来は袖つきだった裂織の袖を取って実用に供したことが始まりではないかと推測させられる。

袖なしの裂織は、海浜部の裂織と他地域とに違う傾向が見られる。海浜部は色が大半は紺無地で、脇にはマチが入らず前後の身頃を直接綴じ付けていることである（図7-1-2、図7-2、図7-3-2）。

山麓や平場のものは、全部サシモンと呼ばれており、大半は刺子のマチ布が脇に入っており、色も福井のように紺無地に近いサシモンもあるが、原則としては色とりどりの横縞模様が入っていて、緯の裂きぐさも多く使わず、ざっくりと粗く織りあげられているのが特徴である。

越前浜の裂織の2点（図7-4）は、同一人によって織られたサシモンであるが、右は紺布を多く使いで堅く織りあげた自家用サシモンで嫁入り時に持たせるもの、左の色縞のサシモンは近隣の村で農業用のサシモンとして織られたもので、農家から持ち込まれたポロ布を緯糸に用いて織ったものだという。

越前浜では大正期までサシモンが織られていた。農漁村とはいえ収穫物の少ないこの海浜部一帯は、角海浜に倣って毒消し売りに出た土地柄であるが、秋祭りに、半年にわたる毒消し売りの行商から帰ってきた母親たちが、留守の間おばあさんが孫の子守をしながら織りあげておいたサシモンを持って稲島などに行き、収穫したばかりの米のクズマイと交

換してもらってきたという。すなわち同じ海浜部でも越前浜は、間瀬・角海浜などとは異なり比較的近年まで、裂織の機織り稼業が年寄りたちの重要な副業としてあったことがわかる。

実際、稲島の調査においても、山仕事の荷担ぎにバンドリの下に着るためのサシモン地が、仕立てられずまだ新しいまま幾つか残されていて(図7-6)、用途に応じて必要な布幅と長さに織り揃えた、当時の裂き織り技法を知ることができた。

越前浜の裂織は、稲島にかぎらず、旧西蒲原郡の福井・石瀬・麓の山麓、平場の遠藤・貝柄・木場・新通^{きば しんどおり}までも持って行ってクズ米との交易に用いたことが昭和30年代の調査で明らかにされている。

筆者の調査でも、多色の横縞のサシモンは、さらに平場の機織り技術の中に吸収され、現在黒埼町の木場⁽²⁸⁾や、現在、新潟市の中野小屋・新通^{(29) (30)}などの、それぞれの土地で大正の終わりから昭和の初期にかけて織られている。農家の荷担ぎの外、冬の藁仕事時の防寒着として、また図7-7の写真左の人物が着用しているような、裂織布を2幅並べて仕立てた、藁仕事用の大きなサシモンマイカケ(前掛け)として、新たに農村向きにつくりだしていたことを確かめることができた。

以上見たような過程をへて、越後の沿岸部で自家用と交易のために織られていたと思われる、日本海から運ばれてくる潤沢な紺木綿布によって織られていた大袖の厚手で丈夫な裂織のツツレは、交易の場を山麓や平場の方にも広げ、地域的環境から山仕事用の袖のない裂織、サシモンとなり、さらに明治の末頃から機織り技術にたけた農村地帯に取り入れられ、色柄のついた着古された自家用衣料を材料として、農村の仕事に合わせ若干の自家用裂織を作りあげていったものと考えられる。

わが国では、昭和初期から10年代にかけての一時期、彩り豊かな裂織が、いわゆるボロ帯やコタツカケが、全国的に流行しているが、これは、不況の時代背景とあいまって、農村に僅かに残っていた機織技術と、丈夫な衣料を容易につくることができるという裂織の特徴を利用するというアイデアが結び付いて、働く庶民向けの裂織を生み出していったのではないだろうか。

日本海からの道を通ってきた裂織は、各地で、このような形で内陸部に向かって裂織を普及させて行ったと思われる。もっとも、縄帯一本、あるいは、細紐一本を締めて日夜働き続けていた明治期までの漁村の人々には、裂織の帯もコタツカケも、思いつくこともない無縁のものであっただろうが。

4. 裂織の系譜とサックリ・ツツレ

越後における裂織の沿岸部から平野部への推移はほぼ明らかになったが、その裂織の形状や色彩の、すなわち袖の有無、紺と色横縞などの異なる地域が、やや交錯しながらではあるが2通りがあるほか、名称にも南沿岸部のツツレと北沿岸部から山麓、平野部にかけてのサシモンの2種があるなど、きわめて近接した地域にありながら少しずつ異なっていることがわかった。

わが国の裂織の全体像はどのようになっているのだろうか。ここで一度、視点をかえ、裂織研究の現状について整理してみたい。

裂織の系譜

記し残されることの少ない庶民の歴史のなかでも、いわゆる「ケ」の日常着である仕事着などについては、これまでは断片的にしか明らかにできず、ましてや裂織の分布図などは図りがたかったが、おぼろげながらその実態がわかってきたのは、大規模な全国の民俗調査結果をまとめた『日本民俗地図』の「衣生活」編⁽³¹⁾が刊行されてからであろう。

そのころから裂織研究も盛んになり、裂織などの特別展も開かれ、裂織分布図も描かれるようになった。⁽³²⁾ 筆者も早速、資料⁽³¹⁾⁽³³⁾に基づいて仕事着のパターン分類を試み、仕事着が東日本と西日本、日本海側と太平洋側の縦横軸によって分けられ、その中で裂織・ツツレ類は日本海側にあることなどを⁽³⁴⁾ほぼ把握した。

また裂織の系譜も究明されるようになり、⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾緯糸に裂いた古木綿布を用いる裂織をサックリとも言うが、それ以前から、経緯糸とも太い麻や藤などによって織られた、やはり同じくサックリ・オクソサックリなどと呼ばれる織物のあったこと、すなわち、木綿布による裂織の時代より前に、木綿以前の糸によるサックリ・サッコリ・シャックリ群の存在、それが裂織の次の時代には、経糸・緯糸とも木綿糸で織ったサックリ（カナサックリなど）になっていったらうという興味深い歴史的推移も大体明らかになってきた。

そして、その裂織の系譜を示すサックリ地域は、裂織分布図とあわせると、石川県、福井県を中心としたその周辺部にあるらしいこともわかってきた。これは丁度、越後のツツレ・サシモンと呼ばれる裂織地帯と交流のあった地域と重なる。

一方、ツツレについては、『日本霊異記』(822年頃)の「衣无^なく藤^{つづ}を綴^つる。日々沐浴^{かわあ}みて

た苧^{おぐそ}尿を緯糸にしたオクソザックリ地帯（加戸や雄島の一部の白サックリ、本荘・木部の紺染めのサックリ）のほか、サシコザックリ地帯（雄島地区は装飾的な麻の葉刺し・さや形刺し、新保は細かなぐし縫いのチリメンザシ）⁴³もあり、刺子技法によるものもサックリになっていることがわかる。

福井県に続く京都府の日本海側にもサックリ・サッコリ・サッキョリ・サキヨリなどと呼ばれる裂織の分布していることは、京都府立丹後資料館の調査で明らかにされているが、⁴⁴その中の丹後半島の裂織のサックリは、袖形は異なるとはいえ豊富な色彩の横縞の柄が、新潟県の越前浜から内陸の平野部にかけて使われていた裂織に類似していることが注目される。

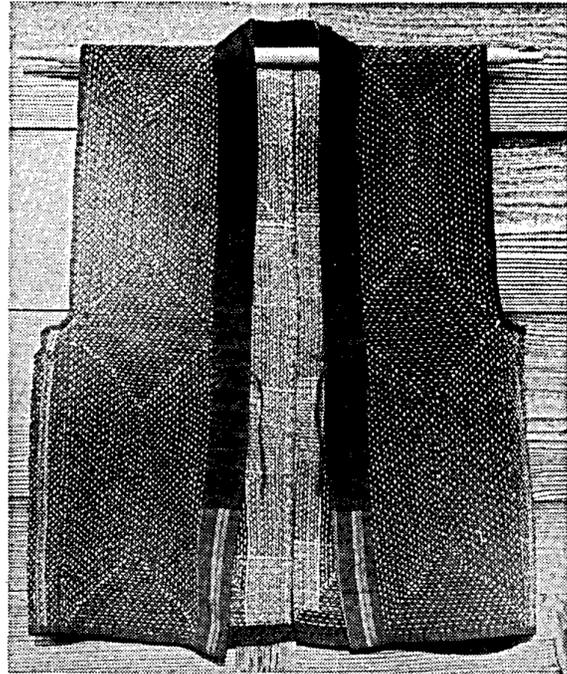
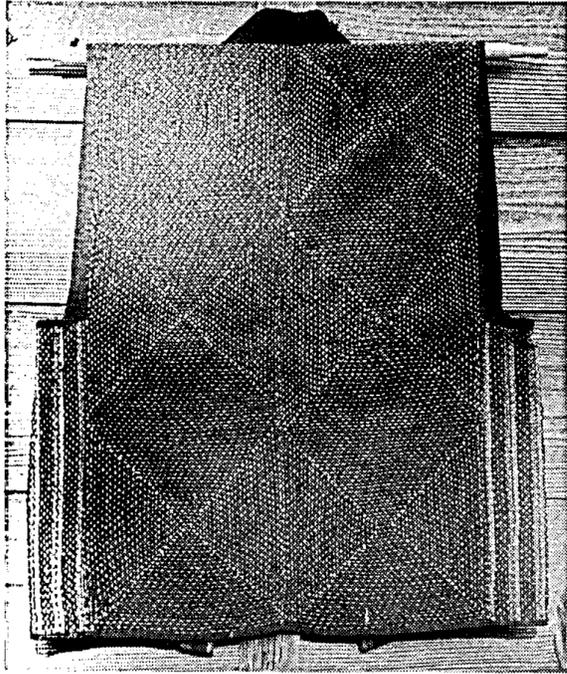
越後では、その色横縞の裂織類をサシモンと呼んでいるが、その名称を今回用いた全国調査資料の中に探したが、青森にも裂織の名称としてサグリ・サクリなどはあるものの、サシモンなどは見つけることができなかった。しかし越後では、すぐ隣の、前述の船絵馬のある、かつて裂織の材料を提供したと思われる寺泊では、昔は漁師の刺子（布を2、3枚重ね合わせて、模様などを刺し縫いしてから衣類に仕立てるもの）の仕事着をサシモンと呼んでいる。⁴⁵

サシモンは語源的にみれば「刺したもの」であろうから、刺し縫いした布や衣類を、またその行為を指すと考えるのが順当で、寺泊のサシモンは納得できる。しかし旧西蒲原郡の人たちが、裂織をためらいもなくサシモンと呼ぶのはなぜだろうか。

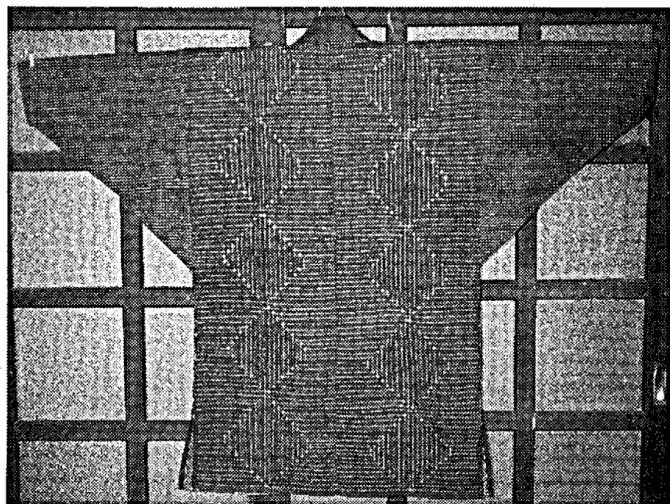
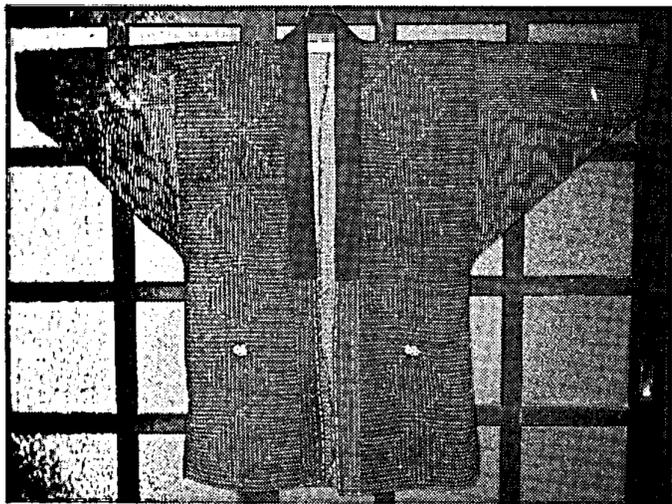
このあたりでは一般に縫う裁縫をヌイモン、ツギ（布きれ）での繕い刺しをツギモン、洗濯した布をハリイタに張る仕事をハリモンなどといっている。裂織を織る時は、⁴⁶杼を使わず、細い板切れなどに、細く裂いた布を巻き付け、織機に張った経糸の間に挿すようにして布の横糸を通して織ったものだと話者たちはいうから、それ故にサシモンとしても矛盾はないのかも知れない。

なお越前浜には立派な刺子の袖なし（写真7）もあり、これをサシコといっている。そのほか、激しい労働で衣類が破れる度に布きれを当てがって刺し縫いしてはまた着る仕事着をドンザといっているが、それほどはっきり分けて命名している訳でもない。対岸の佐渡でも、裂織はサッコリやツツレであるが、刺子のサシコを越前の三国と同様サッコリと呼ぶこともあり、また刺子、裂織をドンザともいっている。⁴⁷このような仕事着の名称の混在はいずれの地域にもよくみられる。

物の本来もっていた呼称の意味が、物から離れて一つの独立した名称となって、他の物に新たな名称を付与しながら勝手に一人歩き出来るのは、奢侈禁止令の及ばない次元で、古布を立派な再生布に蘇らせることのできるたくましい庶民あつての故であろうか。



越前浜—新潟—



能登(輪島市立民俗資料館蔵)

写真7 柁刺しの刺子模様

能登と越後の仕事着

越後の越前浜のサシモンについては、地名が共通するにもかかわらず、サックリの呼称の多い越前からの海の道を特定することは出来なかったが、角海浜の裂織技術とツツレの名称は、先に見た図2の歴史的経緯や、図4のツツレの分布から考えても、能登から日本海を通して運ばれてきた可能性は大きいのではないだろうか。

能登のツツレの実物は、博物館などにもあまりなく、越後とかかわりの深い輪島市鷺入でも、すでに見ることの出来る状態ではなかったが、輪島市町野町の輪島市民俗資料館には裂織の収集品が数点あって見せていただくことが出来た。

目録から調べると、この資料館所在地近辺の西時国や寺山、鈴屋、徳成谷内、北丸山等で、昭和46年から50年にかけて集められたもので、女性用、クサツツレ、カナツツレなど

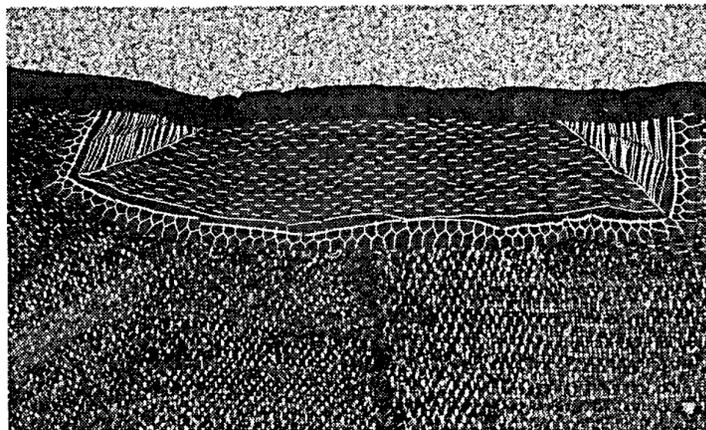
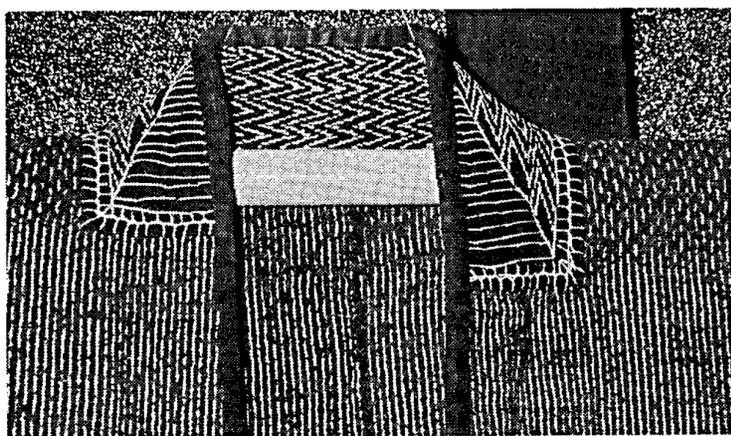
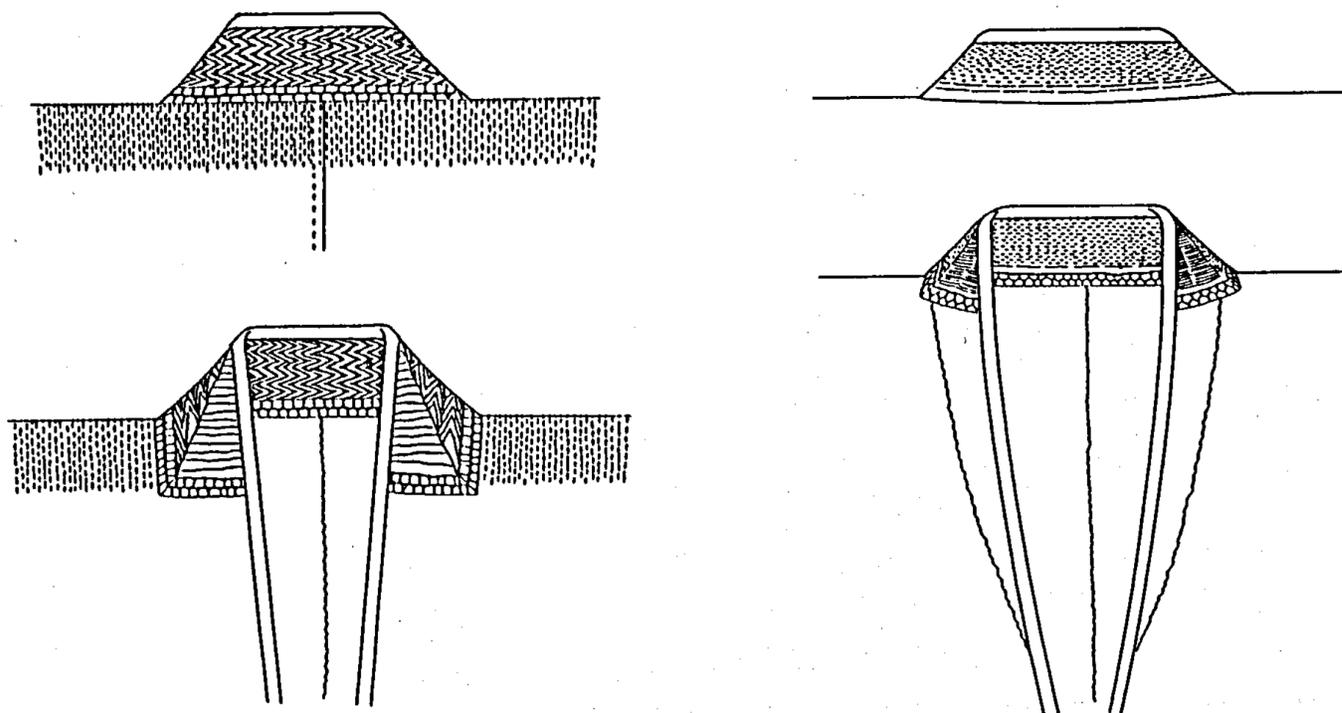


図5-1 衿の装飾，能登のツツレ（輪島市立民俗資料館蔵）

付記されているが、いずれもツツレという名の裂織⁽⁴⁵⁾7点であった。「ツツレは多目的作業着で、裂き織りした上にさらに木綿糸で刺すなどして丈夫にしたもの。能登の娘はツツレが織れないと嫁に行けないといわれていた」など資料館の案内書⁽⁴⁶⁾に書いてあった。

輪島市民俗資料館では、越後の裂織地の仕事着のイメージと重なるものに幾つか出会ったような気がした。特に、他にはない角海浜との共通点、と思ひ込んだものに衿の刺子の装飾模様があった（図5-1・2）。

一般的に仕事着の衿は、衿肩明き部分を補充し、また替え衿の便も兼ね、美的なアクセントともなる黒い衿布をつけることが多いが、角海浜のツツレは、補強に加え商品としての付加価値を高めるためか、さらにその上に単純であるが装飾性に富んだ刺し模様を入れたツツレが多い。このような衿の様式化は、個人の趣味的補強の刺子を除けば、全国的にみても、あまり例を見たことが無かったため注目したのであるが、後に写真で両者を比較

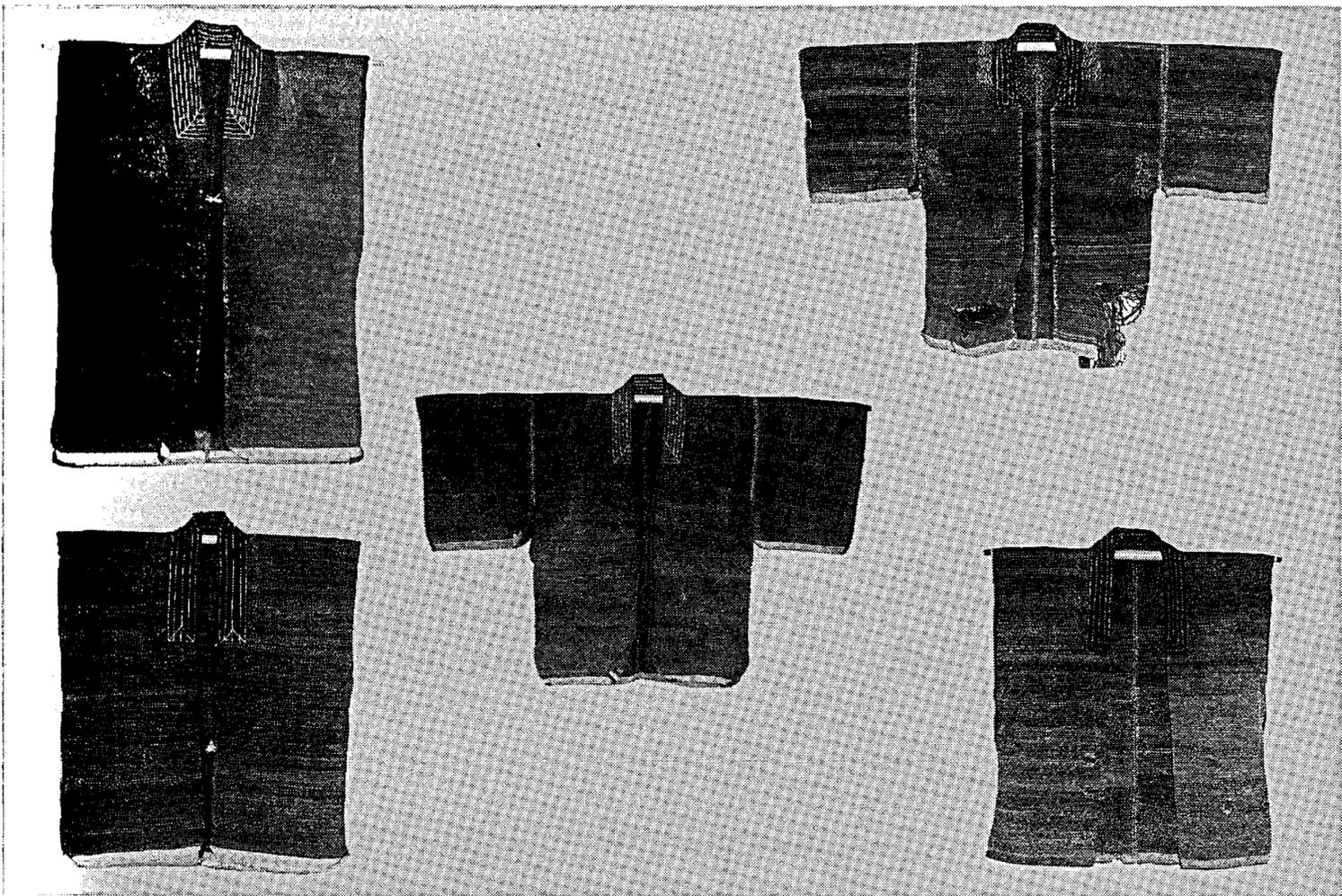
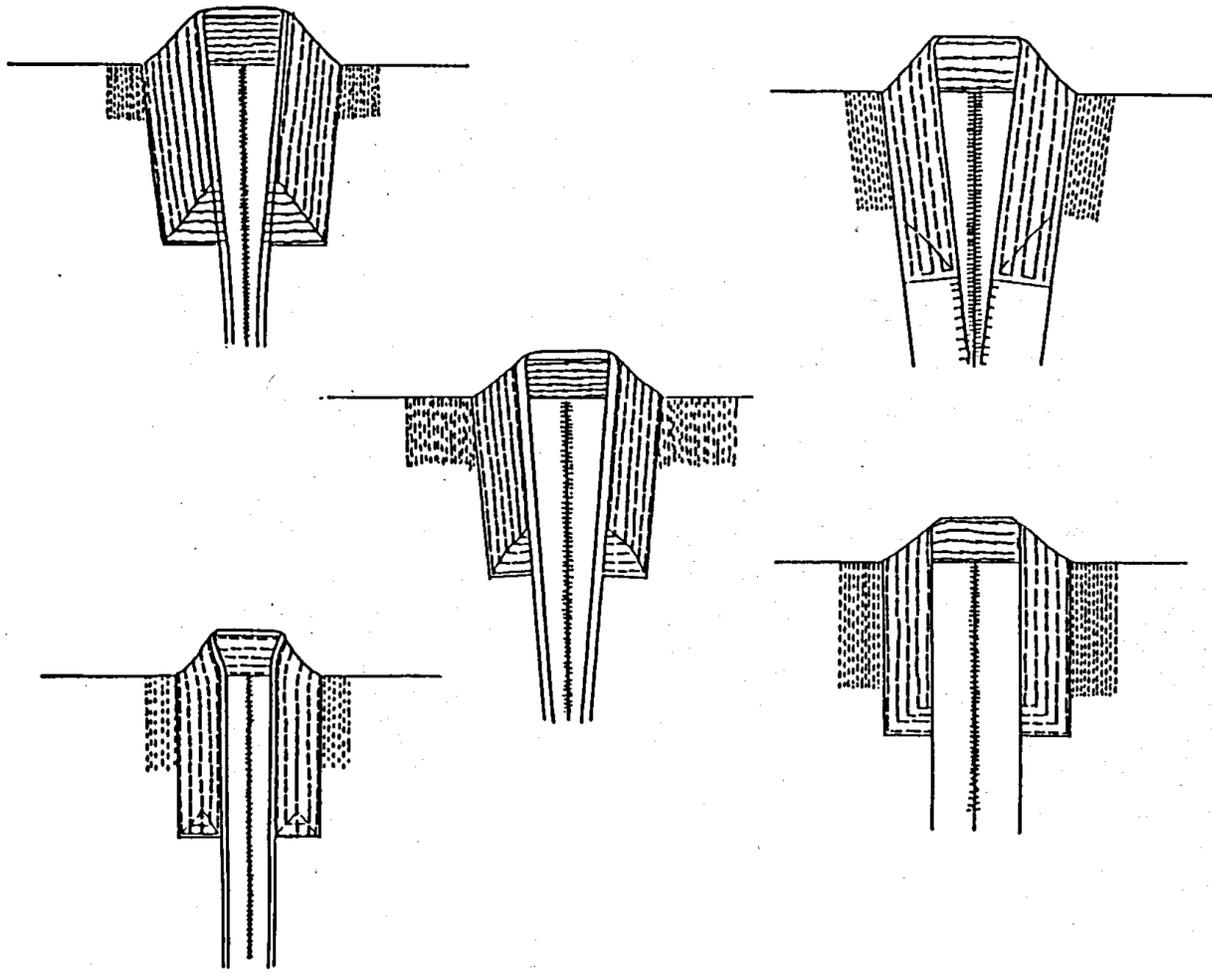
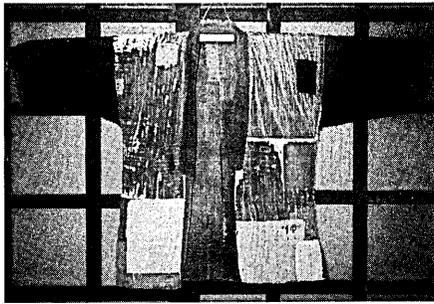


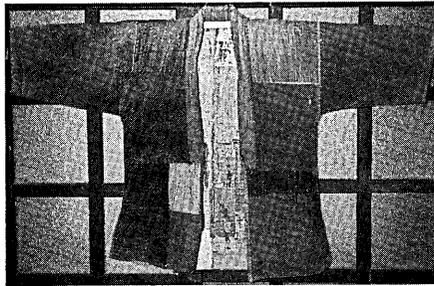
図5-2 衿の装飾, 角海浜のツツレ (巻町郷土資料館蔵)



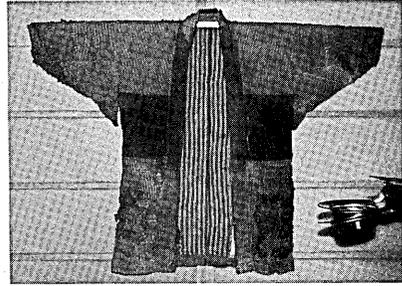
能登(輪島市立民俗資料館蔵)



角海浜一新潟一



能登(輪島市立民俗資料館蔵)



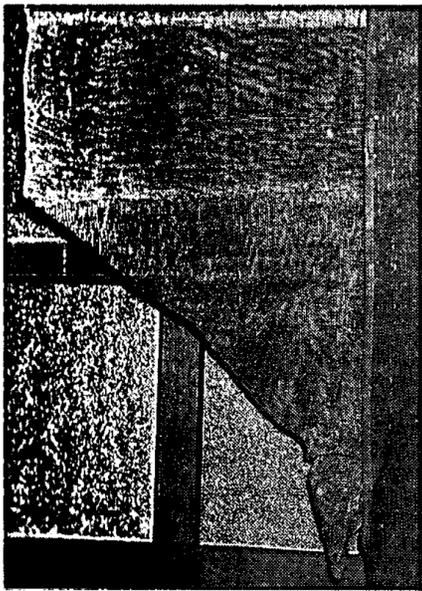
五ヶ浜一新潟一

写真8 ツギハギの仕事着

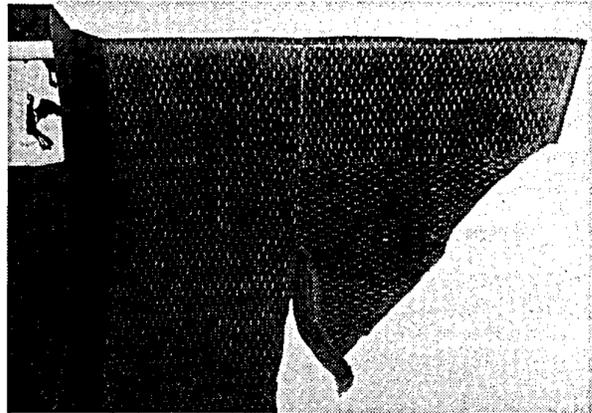
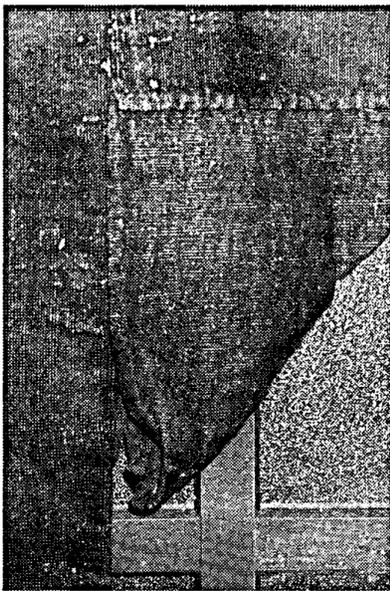
してみると、洗練された手法と、素人の稚拙な表現の差は、衿の形状の違いも含めて歴然としていたのであった。アイデアの共通性を言うにも、やはりこれは衿明きの処理に対する自然発生的な同じアイデアとするほうが妥当であろう。

輪島市民俗資料館でみた仕事着群は、越後の仕事着にそれほど近似していた訳ではないが、それにもかかわらず、しかし能登は越後の裂織地と無縁ではない、と思わせる雰囲気^ニに充ちていた。ツギハギの仕事着、これは実は、どこの漁村に行っても見られるのであるが、激しい労働を象徴した、今様にいえば大胆なパッチワーク(写真8)は角海浜や五ヶ浜のそれを思わせた。また、他地域にも点在はしているが、特殊な振り付きのモジリ袖(写真9)も角海浜にそっくりである。これは越後のもう一つの裂織地の上海府でも、柏尾のオツツレと呼ぶ藤布衣にかぎってこの袖型を用いており、着用時には年令に合わせた色のタスキをかけたものだという。また、能登の菱形に見える^{ますぎ}柵刺しの刺子模様は越前浜のサシモンに類似していた(写真7)。

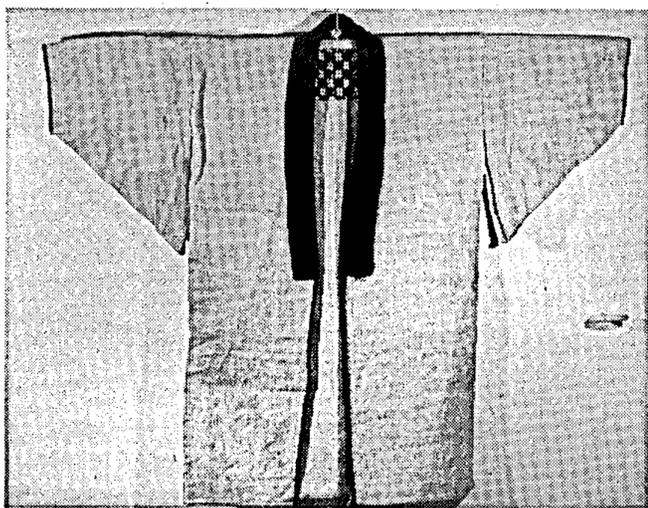
少し地域を拡大して考えると、そのかわりにはさらに広がりを見せて展開する。これも各地によくある形状ではあるが、佐渡のツツレや、越後の上海府のツツレと同名、同形の裂織が能登にもある(写真10)。さらに石川県羽咋郡志賀町の、緋や紺無地を彩りよくはい



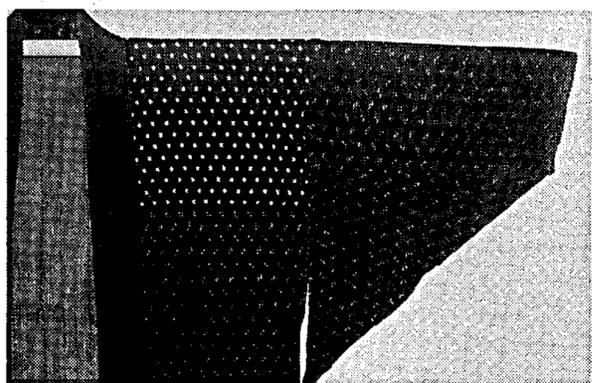
能登(輪島市立民俗資料館蔵)



角海浜—新潟—

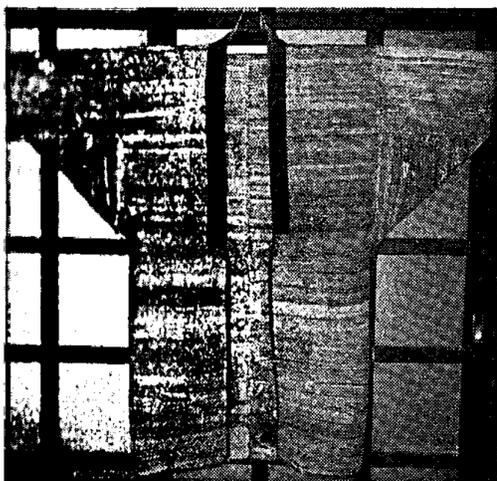


柏尾—新潟—

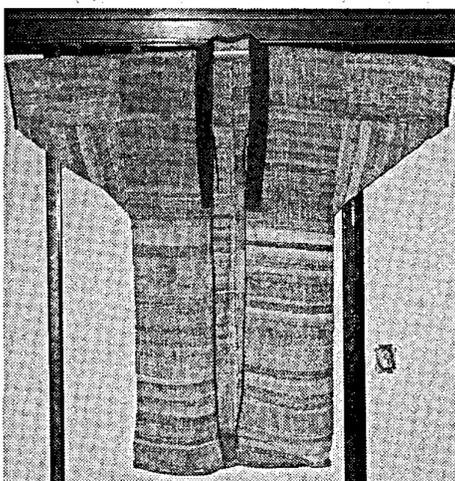


角海浜—新潟—

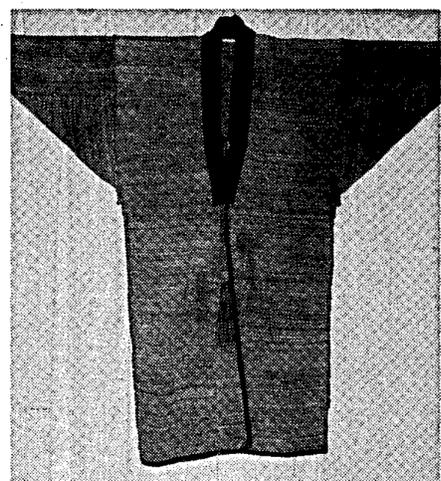
写真9 フリつきのもじり袖



能登(輪島市立民俗資料館蔵)



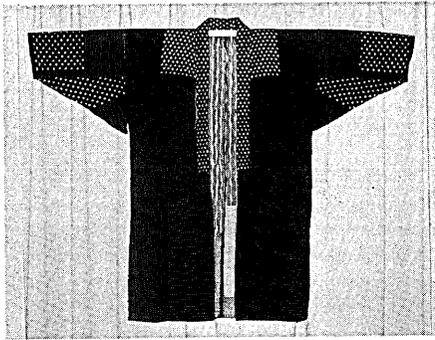
吉浦—新潟—



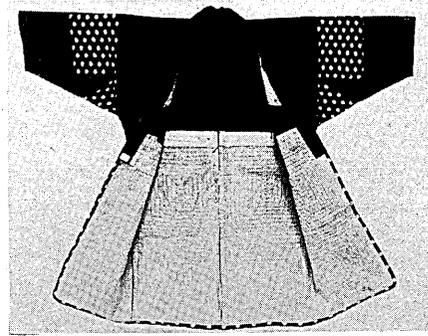
佐渡(小木民俗資料館蔵)—新潟—

写真10 裂織のツツレ

だ女物のサシコボット(石川県立歴史博物館蔵)は、越後の間瀬のツギコシドンザ⁽⁴⁷⁾の意匠構成が似ており、福井県の三国のサックリにも共通するものがあり(写真11)、それと同類の意匠構成の極致をしめすものは、九州長崎県下縣郡の豆酸²の島のハギトージン(国立民族学博物館⁽⁴⁸⁾)といえよう。

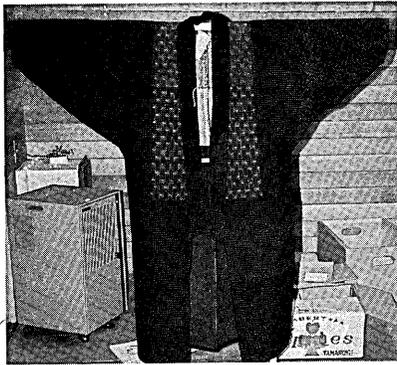


間瀬のツギコシドンザー新潟一

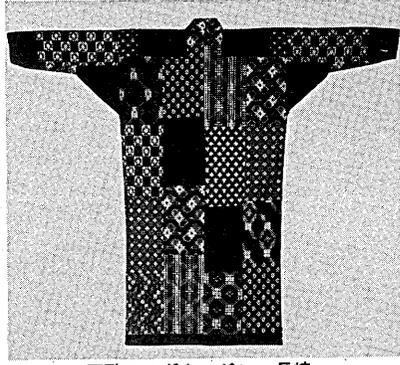


能登のサシコボット

(石川県立歴史博物館蔵、『刺し子と裂き織り』から複写)



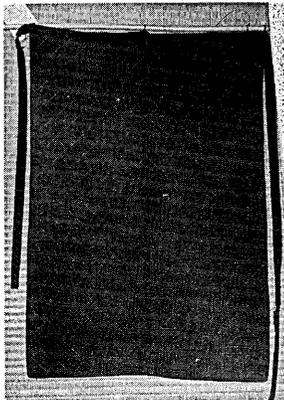
三国のサックリ(三国町郷土資料館蔵)



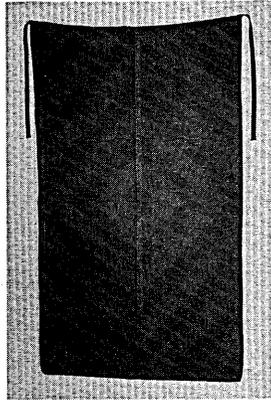
豆酸のハギトージン一長崎一

(国立民族学博物館蔵、『日本の労働着』から複写)

写真11 仕事着の意匠構成



佐渡(小木民俗資料館蔵)



柏崎(新潟県柏崎市教育委員会蔵)

三国町郷土資料館では、佐渡と同じ刺し模様の大風呂敷をみたが、また、逆に、北上してみると、北海道で刺したという、ほとんど同じ刺し模様の前掛を、新潟県の柏崎と佐渡の小木(小木民俗資料館)で見つけることができた(写真12)。

知見しえたことを、端から並べ

写真12 北海道で刺したという同じ模様の前掛

あげてみると以上のようになるが、能登と越後だけにかぎらず、仕事

着の素材をつくる技術や、各部位の形状や色彩や意匠や、また名称などが、不確かな情報を伴いながらも、すでに広く全国的に流布する時代に至っていたことが感じられる。

5. おわりに

裂織文化のあまりない越後への、裂織の通ってきた海の道はどのようなものだったのであろうか。

いま、ここで各種の仕事着からも見られたように、裂織の能登から越後への道を推定するときに、やはり考慮しなければならないのは、地理的に近く、歴史的にも交流の頻繁な、佐渡の地であろう。唄にある「佐渡は四九里、波の上」の49里は能登からの距離であるといわれるように縁も深い。

佐渡でも裂織の呼称は一律ではない⁽⁴⁴⁾ようで、相川町高千・外海府から両津湾岸の村ではツツレ・ツウレ・ツウリであり、角海浜・能登のツツレの裂織と共通するが、相川町戸地から相川町の町場にかけてはサッコリ・サキオリ、国仲や小佐渡でもサキオリ・サッコリ・サケオリと、能登というよりむしろ京都府の丹後半島東部や大浦半島東部のサッコリと名称が共通⁽⁴⁵⁾して、越後のツツレ・サシモンとは異なり、ここも仕事着文化の雑居地帯であることがわかる。

越後へのツツレの海の通り道は、佐渡ともかかわりながら能登と結ぶことができたが、ここで最後にその裂織の道を、さらに延長することを試みた。

越後の裂織の名称を、ツツレを原初的なものとして、その呼称を持つものを絞ってみた場合、能登からのツツレの呼称の南下は、陸路からは図4からみてもわかったようにすぐさま途絶えており、陸から孤立した能登半島への裂織文化の伝播はやはり日本海に目を向けなければならない。

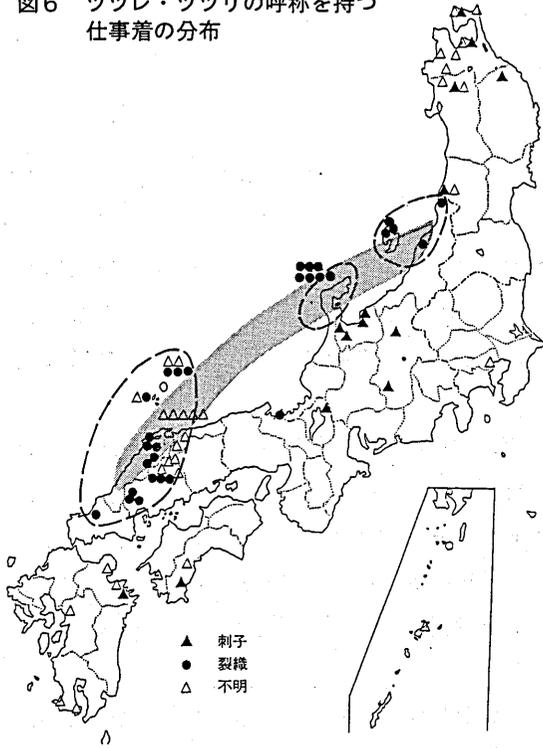
図1によってもわかるように、海岸沿いにみると旧若狭・丹後も裂織地帯であるが、ここは呼称からいえば大半は旧加賀・越前の延長線上にあるサックリ系統に属する。

そこで、観点をかえて、ツツレの呼称をもつ仕事着からその伝播の流れをさぐることにした。図4に用いたものと同様な全国調査資料をつかって、図6のツツレ・ツツリの呼称を持つ仕事着の分布図をつくってみた。

ツツレと呼ばれているものを、裂織・刺子・どちらか不明にわけてつくった分布をみると、裂織をツツリと呼ぶ地域が、隠岐諸島を中心に、島根県の一帯まで、山陰地方に分布しているのがみられる。いずれもツツリ・ツツレなどと呼ばれていて、サックリ系統の呼び名はない⁽⁴⁹⁾。

さらに山陰のツツリは、日本海沿岸から上陸したあと出雲地方を横断して、広島県の芸

図6 ツツレ・ツツリの呼称を持つ
仕事着の分布



北地方に至り、中国山地の村々で、色横縞を交えた裂織のツツリ・ツツレとなっている。広島県の経済圏への経路は、日本海沿岸ルートと瀬戸内海沿岸ルートの2種があるが、ツツリすなわち裂織の技術伝播の経路は日本海ルートであろうとされており、この日本海沿岸部から山間部への裂織の伝播は、越後の西蒲原郡の浜から山麓・平場部への伝播ルートを想起させる。どちらの裂織も袖なしで、形状は若干異なるがいずれも山仕事のための機能をはたしている。ツツレ・ツツリの名称は青森県など東北地方や、九州・四国・その他全国にも散在しているが、裂織のツツレ地域はかなり絞られるようである。

すなわち結論として、方向性は不明確であるが隠岐・出雲から日本海の道を北上して、能登を経由して佐渡を含めて通して越後に至る、ツツレの呼称を持つ裂織の、海の通路が推定できるのではないだろうか。もっとも、そこには先にみたように越後と山陰地方を結ぶ直接の交流の可能性も考えられるが、これは今後の問題としたい。

大海原の大舞台を、多くの船、特に江戸中期から活躍した大きな帆を揚げた北前船などが、縦横に走りまわり、港ごとに積み荷と一緒に情報の置き土産をしていく、そんな、文化の大ルツボのような日本海の様子が目に見えるようである。

そして、この裂織一つから照らしてみても、日本海は色々な文物の往来する通路にとどまらず、荒波のフルイを通すことによって、その文化の持つ意味や呼称や用途などが、その本来持つ意味から解き放され、たどり着いた土地の適性に合わせて自由に息づいたりしていったのではないだろうか。

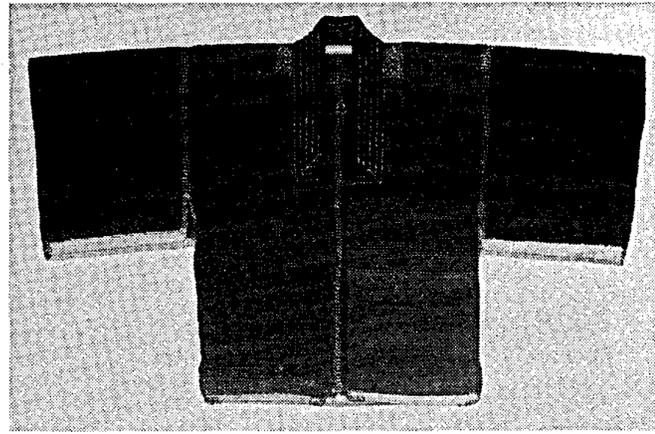
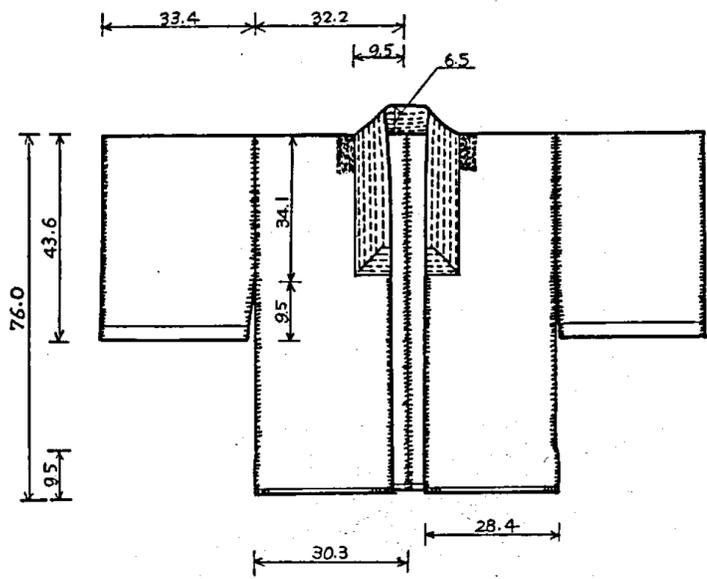


図7-1-1 角海浜のツツレ (上原甲子郎民具資料)

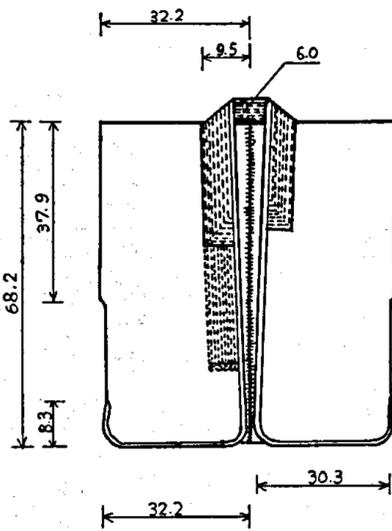


図7-1-2 角海浜のツツレ (上原甲子郎民具資料)

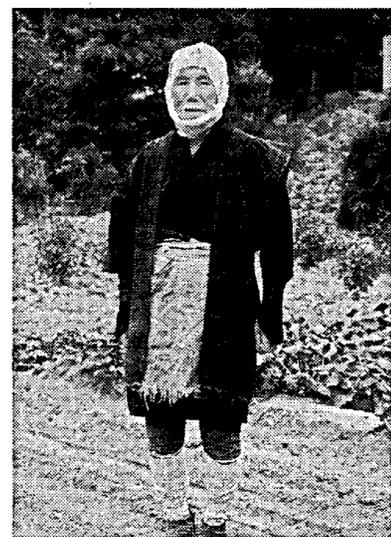
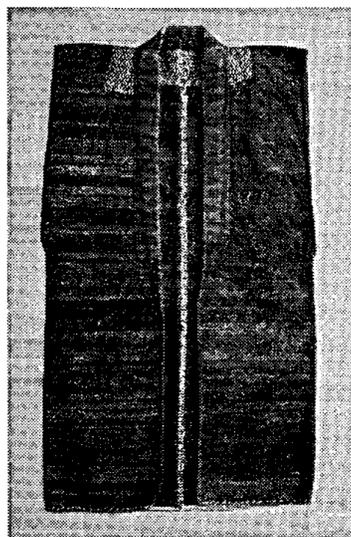
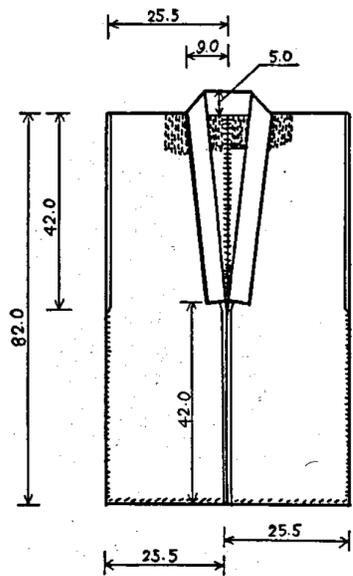


図7-2 間瀬(浜)のツツレ

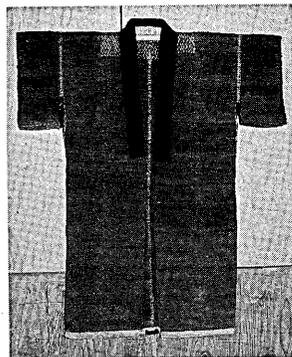
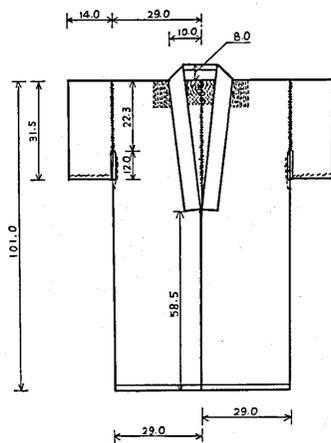


図7-3-1 角田浜のサシモン

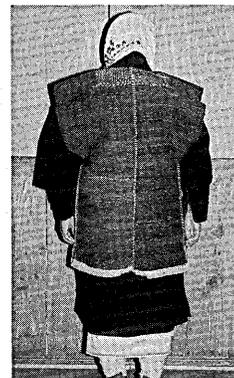
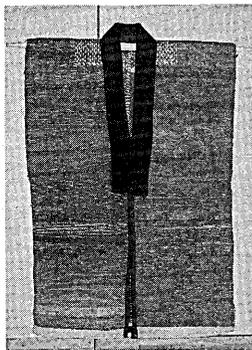
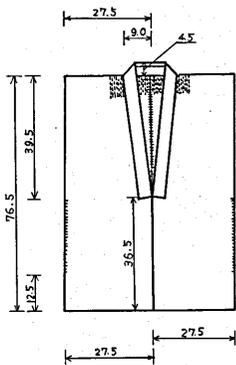


図7-3-2 角田浜のサシモン

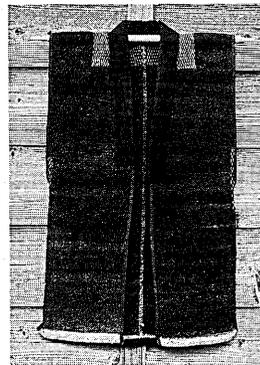
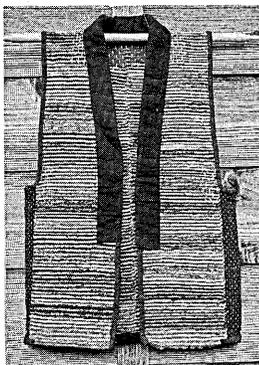
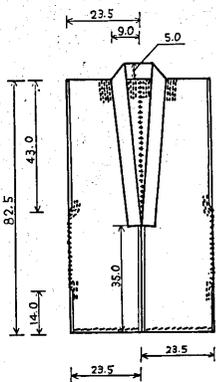


図7-4 越前浜のサシモン

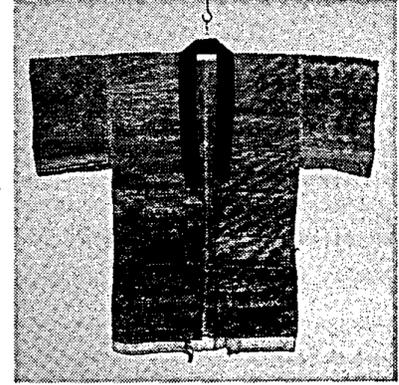
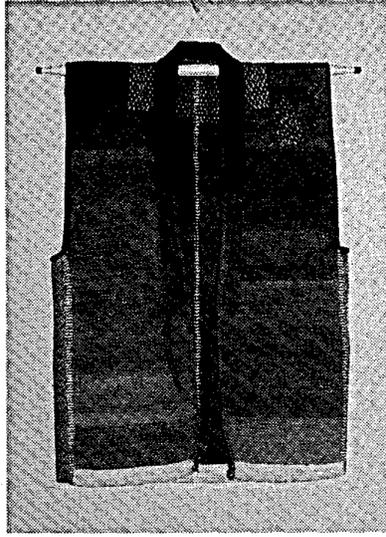
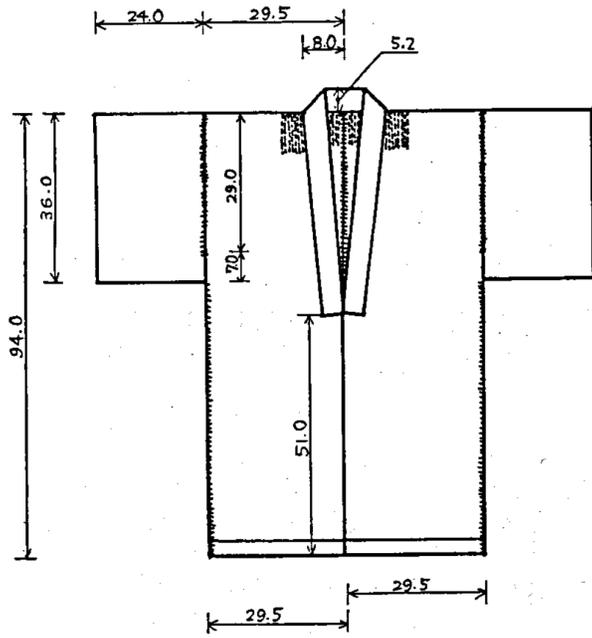


図7-5 福井(山麓)のサシモン

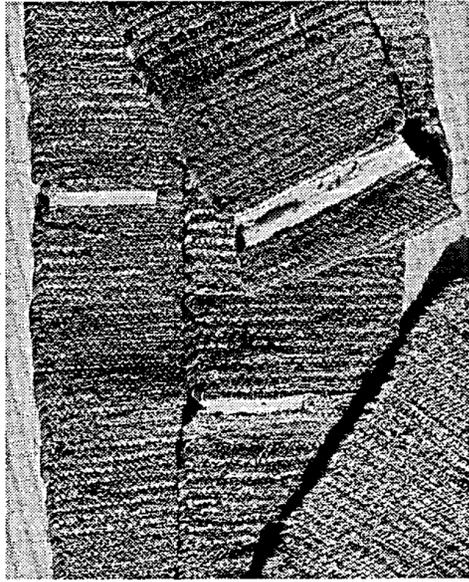
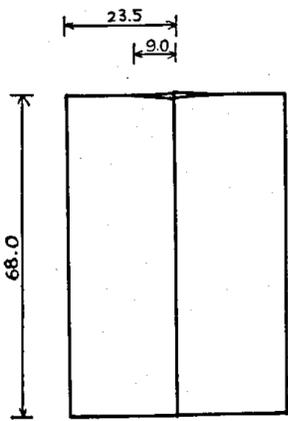


図7-6 稲島(山麓)のサシモン

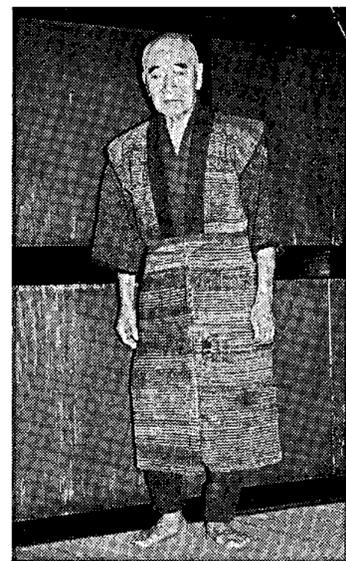
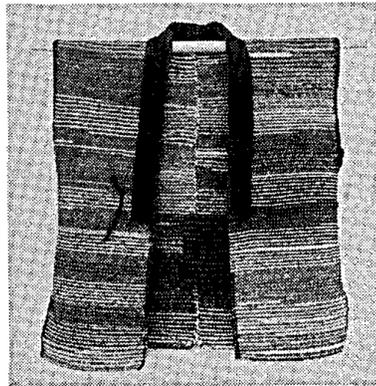
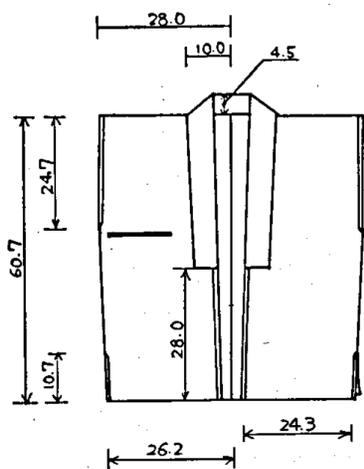


図7-7 中野小屋(平場)のサシモン

〈文献〉（話者の談を含む）

- (1) 第6回日本海文化を考える富山シンポジウム『衣と装いの文化』23頁 1988
- (2) 大阪市立博物館編『北前船と大阪』26頁 1983
- (3) 山崎光子「特集 裂織—越後—」『染色α』No.34 26～29頁 1984
- (4) 山崎光子「越後の民俗服飾—藤布衣について」『風俗』14巻3号 73～80頁 1976
- (5) 内藤富士男『角海浜の民具』巻町双書 27集 57頁 1979
- (6) 文化庁編『日本の民俗 IV』1974
- (7) 山添滝次郎（明治26年生れ）懐旧談「角海浜歴史展望」1959
- (8) 山崎光子「浦浜の衣生活—五ヶ浜と角海浜の仕事着」『巻町史研究Ⅱ』73～95頁 1986
- (9) 山添治一家文書（天保13年）巻町双書 8集 資料編 64頁 1963
- (10) 『新潟県史 近世3』425・426頁 1988
- (11) 山崎光子「寺泊町の衣生活」『寺泊町史 資料編 IV』245～248頁 1988
- (12) 『輪島市史』370・414頁 1976
- (13) 城願寺文書（天正18年）巻町双書 8集 史料編 64・65頁 1963
- (14) 山添真一『かくみ浦』82～95頁 角海会 1960
- (15) 『越前町史』上 370～373頁 1977
- (16) 小村式『越後の毒消し』巻町双書 8集 40頁 1963
- (17) 『巻町史 資料編2』542頁 1988
- (18) 斎藤順作『村・家・人』巻町双書 16集 40頁 1971
- (19) 亀井功『角田浜村の歴史』巻町双書 32集 2・3頁 1984
- (20) 『巻町史 資料編2』544頁
- (21) 輪島市鶴入、浜野七三郎氏（大正8年生れ）・山崎千代子氏（昭和3年生れ）談
- (22) 内藤富士男「衣生活」『角海浜総合調査報告書』巻町・潟東村教育委員会 121頁 1975
- (23) 西蒲原郡巻町福井 桑原ハナ氏（明治35年生れ）談
- (24) 西蒲原郡岩室村間瀬 辰島ハツ氏（明治43年生れ）談
- (25) 斎藤嘉吉「交通・交易」『角海浜総合調査報告書』132頁 1975
- (26) 西蒲原郡巻町越前浜 篠沢タマ氏（明治44年生れ）談
- (27) 石山与五栄門「サシモン・サシコ・ドンザ」『蒲原の民具』巻町双書 4集 9頁 1962
- (28) 西蒲原郡黒崎町 萩野覚心氏（大正3年生れ）談
- (29) 新潟市中野小屋 椎谷太郎氏（明治29年生れ）談
- (30) 新潟市新通 南波シゲ氏（明治34年生れ）談
- (31) 文化庁編『日本民俗地図 VIII』1982
- (32) 京都府立丹後資料館編『特別展 刺し子と裂き織り』1982
- (33) 『日本の衣と食』全10巻 明玄書房 1974
- (34) 「シンポジウム仕事着研究の現状と課題」『第9回民具研究講座講演要旨』1982
- (35) 中村ひろこ「サキオリの分布と分類,ならびにその系譜」『染織α』34号 14～17頁 1984
- (36) 脇田雅彦「サックリ考1・2」『民具マンスリー』16巻 10・11号 1～11・12～21頁 1984

- (37) 『日本靈異記』 日本古典文学大系70 104～107頁
- (38) 太田英蔵「藤の衣」『京都の林業』 昭和51年1月号 京都府林業改良普及協会 3頁
- (39) 『日本の民俗』 全47巻 第一法規出版 1971～75
- (40) 神奈川大学常民文化研究所編 『仕事着—東日本編』 『仕事着—西日本編』 1986・1987
- (41) 『福井市史 資料編 13』 238頁 1988
- (42) 『三国町史』 870頁 1983
- (43) 『三国町の民家と町並』 三国町教育委員会 17・18頁 1983
- (44) 柳平則子 「佐渡の仕事着」 『仕事着—東日本編』 180～186頁
- (45) 輪島市立民俗資料館 「資料目録」 1975
- (46) 輪島市立民俗資料館 案内書「昔と語ろう」
- (47) 山崎光子 「野の女の働くことと着ること」 『家庭科教育』 54巻15号 14頁 1980
- (48) 中村たかを編 『A・Mコレクション日本の労働着』 源流社 1・134～142頁 1988
- (49) 勝部正郊 「特集 裂織—隠岐—」 『染織α』 34号 39～42頁 1984
- (50) 西井章 「特集 裂織—広島—」 『染織α』 34号 44～46頁 1984